

る）、人種の混交的多様性。ブラジルでは、「われわれは多様であることがその單一的特徴である」といわれもする。こうした混交性を、和辻ならどのように処理しえたのだろうか。こうした「多様である單一」という事情もまた、南米的な風土のなせるわざと考えたのであろうか。

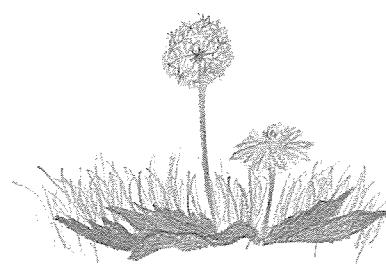
だが、こうした遷移はもちろん幸福さを生むだけではない。

コンクリートでできた近代建築をよしとし、結果として多大な湿気を除去するために電力を多用し、壊れればすぐにつくりなおせる木と紙の家を利用しなくなつた現在の日本のあり方を振り返ると、どうなのだろうか。

最後に、突然ではあるが、すでに故人となられた哲学の坂部恵先生が、日本語の哲学を主題とするあるシンポジウムで、突如、論文なんてしれしれつと英語で（グローバル言語で）書けばいいのだし、われわれは「ラジル哲学」（？）だってやつたつていい、日本が英独仏の哲学をしなければならないなんていう限定はもはやない、と発言しておられたことをおもいかえした。自分の記憶なので正確でないかもしれないし、坂部先生が「ラジル哲学」（いや、「メキシコ哲学」だったかも知れない）をとりあげられたことに、特に深い意味はなかつたのかも知れない（ヘトナム哲学でもタイ哲学でもよかつたのだろう）。だがこの発言は、日本語を大切にしつづけた坂部先生にとって、ある種のグローバル的状況において、もちろん西洋語の重要性と日本語の記述の可能性を重々尊重しつつも、やはり西洋一辺倒

的な視線に対する攪乱を狙うべきだという趣旨のものであつたのでは、ともおもわれる。こうした多様性に対する感性論が、和辻をひきうけて、あるいは和辻を超えて（坂部先生は和辻哲学のよき記述者でもあった）、現在の状況において必要であることはいうまでもないだろう。

（ひがき　たつや／大阪大学　現代思想・哲学）



虚空の舞

—ふたりのシモーヌ・ヴェイユ

今 村 純 子

世に広く知られているシモーヌ・ヴェイユという人物は、ふたりいる。そのひとりは学者シモーヌ・ヴェイユ（Simone Weil, 1909-43）であり、もうひとりは政治家シモーヌ・ヴェイユ（Simone Veil, 1927-）である。本邦では前者の翻訳・紹介が一九五〇年代以降になされ、現在に至るまで、自らの「生の創造」の原動力として、その言葉を糧にする芸術家や労働者は少なくない。他方で本国フランスでは、カトリックに囲繞されたフランスに人工中絶法を導入した政治家として後者の名を知らぬ者はいない。自らの半生を描いた一書『ある人生』（Simone Veil, *Une vie*, Stock, 2007）がベストセラーとなり、二〇一一年『シモーヌ・ヴェイユ回想録』として邦訳出版され、話題になったのは、記憶に新しい。

このふたりの稀有名なユダヤ系フランス人女性たちは、おそらく互いに一度も出会うことはなかつたであろう。だが激動の時

交差する身体

学者シモーヌは、パリからマルセイユ、カサブランカを経て、一九四二年、家族とともにニューヨークへ亡命する。しかしフランスに戻るべく單身ロンドンに赴き、そこで、ド・ゴールの亡命政府「自由フランス」のための文書『根をわら』と

を執筆中に自室で倒れ、肺結核を患う。だが「フランスの子どもに配給されている以上の食べ物はとらない」とし、充分な栄養を取らずに、一九四三年八月、餓死同然の亡くなりかたをする。その半年後の一九四四年三月、のちに政治家となる高校生のもうひとりのシモーヌは、「大学入学資格試験」の翌日にニースで逮捕され、アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所に移送される。だが一九四五年五月、奇跡的な生還を果たす。ヴェイユ姓は、翌一九四六年一〇月に一九歳で結婚した夫の姓であり、すべてを奪われた彼女の「第二の誕生」を象徴するかのごとくである。

自らの愛する人の生命を寿命ではない仕方で奪われた者は、その死を受け入れ、その死を悼むことができない。生者の生にはつねに死者の影が付きまとう。齢八〇となつた政治家シモーヌはこう記している。

あれから六〇年以上過ぎた今も、わたしは母の死を受け入れられないでいることに気づく。ある意味でわたしは母の死を認めていない。母はつねにわたしの傍らにいる。わたしが今まで何かを成し遂げられたのは母のおかげだといふことをわたしは知っている。

ここに哲学者シモーヌの「不幸」の観念を重ねることができよう。不幸において魂は「回復不可能な傷」を負う。けれども、もしその不幸から逃げることなく、不幸を不幸としてじっと見つめるならば、それは美へと転向しうる。だが政治家シモーヌはこう記している。

おそらく、歴史が何度でも繰り返されてしまう深刻な原因のひとつに、端的な悪よりもいつそうたちが悪い、このような「善の相貌をもつた悪」の存在が挙げられるであろう。「善の相貌をもつた悪」の根源を、哲学者シモーヌはこう洞察する。集団がわたしたちを抑圧するのではない。そうではなく、集団に飛び込みそこに安らいたいというわたしたちの心性がわたしたちを縛りあげるのである、と。さらに彼女は悪についてこう考察する。悪は加害者的心にそれと知られずに住んでいる。だがあたかも加害者的心から被害者的心に転移したかのごとくに、悪は被害者の心に感じられるのである、と。だからこそ、驚くべき早さで驚くべき的確さでホロコースト【シヨア】の地獄を描写したと政治家シモーヌが指摘する詩人パウル・ツエラン(1920-70)は、奇跡的な生還を果たし、自らを語る言葉を獲得したのにもかかわらず、自殺を余儀なくされたのであった。

司法官となつた政治家シモーヌは、刑務所の待遇改善に異常なまでの熱心を見せる。彼女は囚人たちの屈辱を放置しておくことができない。こうした行為の果てにふたりのシモーヌの洞察は交差する。刑罰の意味は、自らの犯した悪が感じられないほどまでにリアリティを喪失した囚人たちに、罰を科することによって悪の意識を取り戻させ、そこから善への渴望建取り戻させることにある、と。

「不幸」は「二重の傷」を負う。そのことを政治家シモーヌはこう描く。戦後レジスタンスの闘士は英雄視され社会的威信を獲得する一方で、アウシュビッツからの生還者は「ないもの」として、「見えない存在」として扱われる。さらには、まさしくその生還の「奇跡」には生還者の邪悪な行為が絡んでいたのではないかとさえ揶揄される。こうして「不幸」に陥れられた人は自らを語る言葉を失つてしまつ。さらに彼女は知識人の欺瞞をこう暴く。

誰にも罪があると言うことは、結局誰にも罪がないと言ふに等しいではないか。それは、自分の国を何としても救い、ナチスの責任をより漠然とした責任のなかに沈めようとするひとりのドイツ人女性【ハンナ・アーレント】が示した必死の解決策である。しかしそのようないい責任はあまりに非人称的なので、もはや何も意味しなくなる。社会全体が後ろめたさを感じるならば、各人は個人のレベルで良心に恥じないですむ。全員が責任を負うのだから、わたしには責任はない、というわけだ。

哲学者シモーヌの場合はどうであろうか。最期まで不幸な人とともにあろうとした彼女にあって、この時代もつとも不幸であつたはずの、自らの属性でもあるユダヤ人に對してはまつた

不幸の刻印

だが「不幸」に陥れられた人は、あたかも「ピンで留められた虫」がバタバタするように、対象に縛られ、対象と距離を保つことができなくなつてしまふ。政治家シモーヌもこの有り様からけつして自由ではない。シヨア記念財團理事長に就任した彼女は、ロベルト・ベニーニ監督映画『ライフ・イズ・ビューティフル』(一九九七年、イタリア)のような作品に財團は支援することはない、としている。なるほど、この映画のように、父子が強制収容所内で一緒に居るということはありえないし、さらにはこの地獄で父親が、子どもの身体を守るためにではなく、子どもの心が世界の醜悪さに染まらないために、生命を賭して道化を演じられるかと問うならば、それは不可能に近いでだろう。だが、哲学者シモーヌがイメージ化するように、「不幸は島をつくつてしまふ、島を出た人はけつして後ろを振り向かない」のであれば、アーカイヴの意味は、正確な事実の記録に留まるものではなかろう。そして古來、芸術は、虚構のダイナミズムが美の感情を惹起することによって、目を覆いたくなれるような対象をじつと見つめさせ、まさしく歴史的でありながら個人的である「記憶」を人々の心に息づかせる役割を担つてきたのではないか。

哲学者シモーヌの場合はどうであろうか。最期まで不幸な人

く目が向けられていない。この墨りは、政治家シモーヌが一貫して左派のド・ゴールに批判的であるのに對して、哲学者シモーヌがド・ゴールの「自由フランス」に共鳴している点においても見てとれる。哲学者シモーヌはナチスの凶悪さに抵抗できる唯一のものを「弱さの強さ」のうちに洞察し、「第一線看護部隊案」をド・ゴールに提出する。だがド・ゴールはこの案の真価を理解することなく、「正気の沙汰ではない」と一蹴する。

そして戦後、哲学者シモーヌが聖女として称揚されるやいなや、かつてその命がけの提案を一顧だにしなかつた女性を、自分はどうほど敬愛していたかを語ることになるであろう。

〔正義であること〕と〔正義と認められること〕

哲学者シモーヌは「完全なる正義の人」をこう描く。「正義と認められること」ではなく、「正義であること」を望むこの人は、「正義と認められること」の一切を剥奪されているために「不正義と認められること」の極に置かれている。それゆえ「完全なる正義の人」は鞭うたれ疎にされ殺害されてしまう宿命のもとにある、と。

政治家シモーヌはこの「完全なる正義の人」を自らの生命の危険をも顧みずユダヤ人たちをかくまつた人々のうちに見る。だが戦後、国家としてこの人々を称賛するとき、この人々の美德は社会という「巨獸」に食い尽くされてしまうことに、「力」を手中にしている政治家シモーヌの目は向かわない。しかし哲

学者シモーヌが述べるように、「美は何も言わない。美は語らない。だが美には呼びかける声がある」ならば、彼らの「存在の美」こそが、わたしたちの「生の創造」を可能にさせる唯一の倫理の地平を切り開くはずであろう。

義務に美を見出す哲学者シモーヌと力により権利を回復させる政治家シモーヌ。一見したところ、接点がないように思われる両者の視線の先是交差し、互いの陷阱をも補い合っている。

だが今日、ふたりのシモーヌ・ヴェイユを敬愛し称賛することはあまりにたやすく、その精神を引き継いでゆくことはあまりに難しい。というのも、今日、ふたりのシモーヌ・ヴェイユに言及したからといって、わたしたちは投獄されたり、処刑されたりすることはないからである。それは、このふたりの名の背後には社会という「巨獸」が待ち構えていることを意味する。「巨獸」に食い尽くされることなく彼女たちと真に向き合い、わたしたち自身の「生の創造」をなしてゆくこと。その実りはあまりに豊饒であり、落とし穴は無数にある。光はつねに闇を背景としている。

*政治家シモーヌからの引用は、シモーヌ・ヴェイユ／石田久仁子訳『シモーヌ・ヴェイユ回想録』（バド・ウイメンズ・オフィス、二〇一一年）による。哲学者シモーヌからの引用は、拙訳による。
(いまむら じゅんこ) 慶應義塾大学 美学・表象文化論

触ると触れる

——人間と世界のインターフェース

古 谷 嘉 章

「触れ」つまり触ることや触ることについての関心が、学問の世界のみならず産業界でも高まっている。触覚、触感、触知性、ハプティック(haptic)、タクタイル(tactile)、タンジブル(tangible)などキーワードが違えば領域も少しずつ異なるが、そのそれにこそ「触れ」の多面性を感じ取ることができ。私たちとは日々、いや四六時中、何かに触れ、何かに触れられるることを通じて、物質的なものであるこの世界を実感している。それほどに身近な体験なのに、「触れ」を謎めいた領域のように感じてしまう原因は、何よりもまず視覚中心主義だろう。

一目瞭然な視覚を介してこそ世界を明晰に理解できるとする信仰の下で、少なくとも西洋近代とその影響下にある現代社会においては、触覚は嗅覚や味覚とともに、曖昧なだけでなく扇情的で低級な感覚として軽んじられてきたのである。

「触れ」への関心が高まりつつある理由が、これまでの視覚

偏重への反省であることは間違いない。しかし同時に、逆説的だが、世界の激しいデジタル情報化・サイバースペース化が背景にある。その最たるものであるインターネットでは、現実となりませになつた仮想現実が日常化し、生の身体的接触が極端に希薄になる一方で、ありとあらゆるものに「手が届く」ようになったかのようだ。私たちは、サイバースペースの中に住んでいると感じ始めてさえいる。しかし人はサイボーグとしては未完成なので、今のところパソコンや携帯電話やスマートフォンなどデバイスを介して接続せざるをえない。

人間の身体と環境の間には、皮膚というインターフェースが存在し、「触れ」はいつでもそこで生じてきたのだが、デジタル情報化は、サイバースペースという新種の環境を生みだし、インターフェースの変質をもたらしている。私はいまパソコンのモニターを見ながら、両手でキーボードを叩いている。マウ